

「聖霊を冒瀆する」

2014年08月05日

マルコによる福音書3章20節～30節。「イエスが家に帰られると、群衆がまた集まって来て、一同は食事をする暇もないほどであった。身内の人たちはイエスのことを聞いて取り押さえに来た。『あの男は気が変になっている』と言われていたからである。エルサレムから下って来た律法学者たちも、『あの男はベルゼブルに取りつかれている』と言い、また、『悪霊の頭の力で悪霊を追い出している』と言っていた。そこで、イエスは彼らと呼び寄せて、たとえを用いて語られた。『どうして、サタンがサタンを追い出せよう。国が内輪で争えば、その国は成り立たない。家が内輪で争えば、その家は成り立たない。同じように、サタンが内輪もめして争えば、立ち行かず、滅びてしまう。また、まず強い人を縛り上げなければ、だれも、その人の家に押し入って、家財道具を奪い取ることはできない。まず縛ってから、その家を略奪するものだ。はっきりしておく。人の子らが犯す罪やどんな冒瀆の言葉も、すべて赦される。しかし、聖霊を冒瀆する者は永遠に赦されず、永遠に罪の責めを負う。』イエスがこう言われたのは、『彼は汚れた霊に取りつかれている』と人々が言っていたからである。」

人は誰もが罪を犯す。自分と隣人を傷つけ、自然を痛めつける。また、神はいない、神を信じることは空しいと不信に陥る。それらは赦される。主イエスは「しかし、聖霊を冒瀆する者は永遠に赦されず、永遠に罪の責めを負う」と言われる。どんな意味であろうか。全てを赦し、神の愛の中に包み込む主イエスの言葉とは思えないので、躓きを覚えて困惑する。この言葉は教義学的な解釈では解き明かせないだろう。主イエスの宣教を阻む律法学者たちに対し、ダイレクトな怒りが発せられた言葉ではないか。

主イエスは生存を脅かされていた民衆を愛し、生きることを保証する具体的な神の恵みと祝福を示された。病がいやされ、悪霊から解放された民衆は歓喜して群がった。一方、モーセの律法を盾に「浄と不浄」を選別し、民衆の上に君臨する律法学者たちは無力であった。自分たちは権威を失い、主イエスに民衆が群がる状況は苦々しいことであった。彼らは、あの男は悪霊の頭であるベルゼブルの力によって悪霊を追い出していると、主イエスを妬み、焦りと困惑の果てに誹謗中傷した。これに対し、サタンがサタンを追い出すような内輪もめをすれば自滅する。悪霊の力ではなく、神の霊の力による救いである。罪や冒瀆は赦されるが、聖霊に対する冒瀆は断じて赦されないと断言された。

エルサレムに入城された受難週の初日、神殿当局と結託した悪徳商人らを蹴散らし、あなたたちは祈りの家を強盗の巣にしていると言われた「宮きよめ」は、主イエスの怒りが爆発した事件である。上記の御言葉も、緊迫した状況の中で、頑なな律法学者たちに激しい怒りを爆発させて、言い放った主イエスの肉声として聞える。

主イエスの周りで起こった出来事を護教的に解釈し、納得させようとしなくてもよい。生き生きとした出会いは、その場でしか通用しない言葉と行動がある。そのように読む時、人間イエスの息づかいがリアルに伝わってくる。主イエスの激しい拒絶の言葉は普遍的な真理ではなく、愛のない律法学者たちに個別に向けられた言葉であろう。人は皆、罪を犯し、神を冒瀆し、聖霊も拒んでいる。それでも尚、赦しに与っているというのが福音の真理である。